



スズ
ギウ
じん
な
や
し
な
て
ッ
プ

他の、どこの誰よりも
わたしが、一番、
あなたとずっと
一緒に居たい！

きまつてる
でしょうが！



あの日、わたしがあなたに
『聞かせた』思いは

『死が二人を別つまで
そばにいます』という
祈りだったのかもしれない

ごきげんヨーソロ
環月紙袋です。

今回はビッグボイス
選手権の後の夜です。

また、ゲストに私雨様を
お招きしています。感謝！

うん

綴理先輩のお部屋に
寄っていいですか？



お互いの感情の輪郭を
辿るような――

順序としては
逆でもあるような

わかり合うための、
言語外の触れ合いを

ガチャ

ポン

…綴理先輩







さや
…すき

ボクの
とくべつ

お互いに
一緒にいたいから
そばにしようとするこ

綴理先輩…

…わたしも
あなたが好き

『さやがほしい』と
綴理先輩の全てが
告げている



わん

わん

わたしも

あ

あ

いん

てん

あなたが
ほしい

綴理先輩
ベッドに…

…うん

ぎん





さやのあじ
全部知りたい

ボクのさや

綴理先輩...っ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ





声
聞かせて
もつと

ボクしか
しらない
さやの声

——っあ！

つづ
綴理先輩





翌朝



朝天子！

ものすごい

100

ものすごく
腰が痛い！

ああっこんな
痕をつけられてる！

ハキハキ

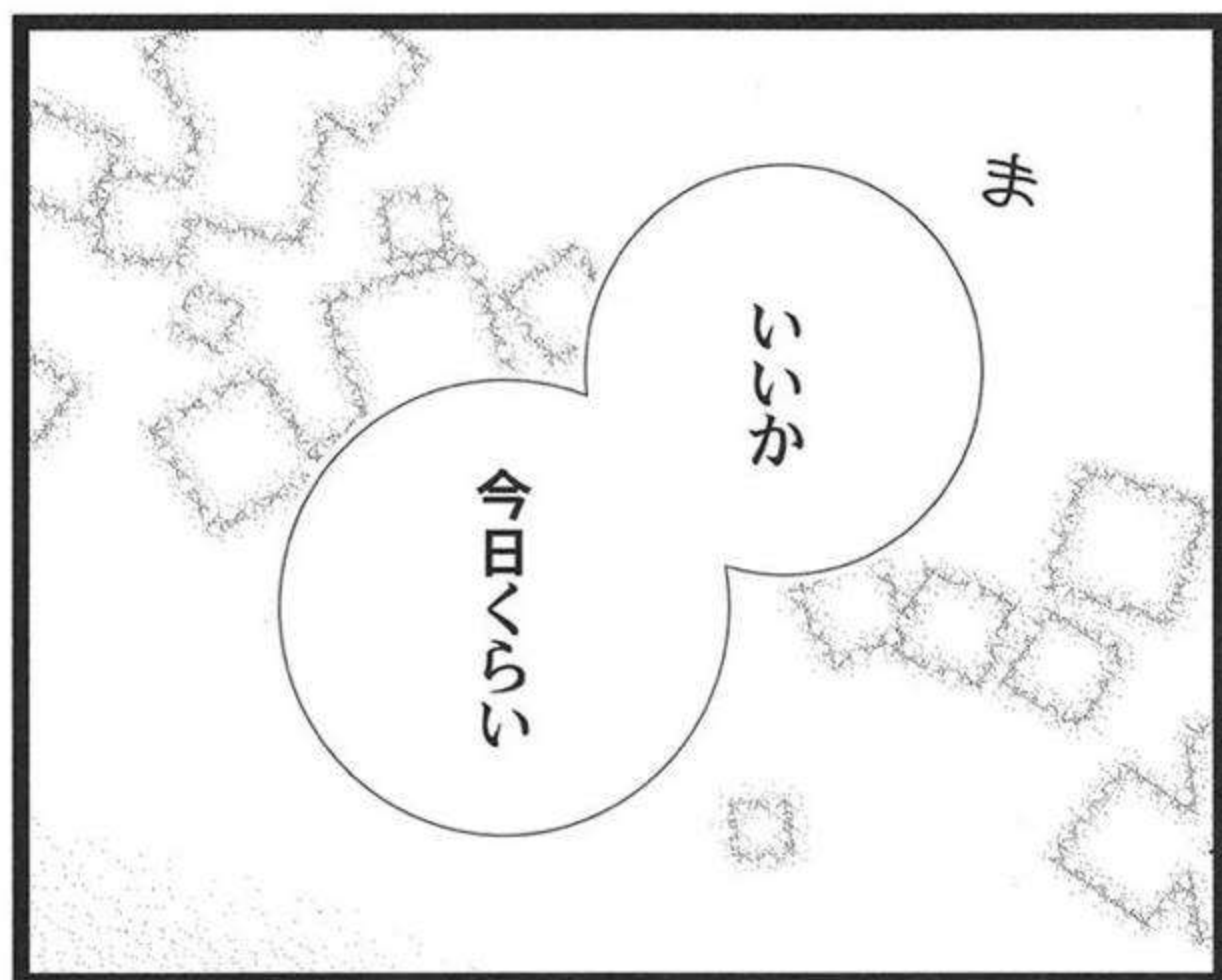
...か

もつとしよう…



はわわ…

あやや



ま

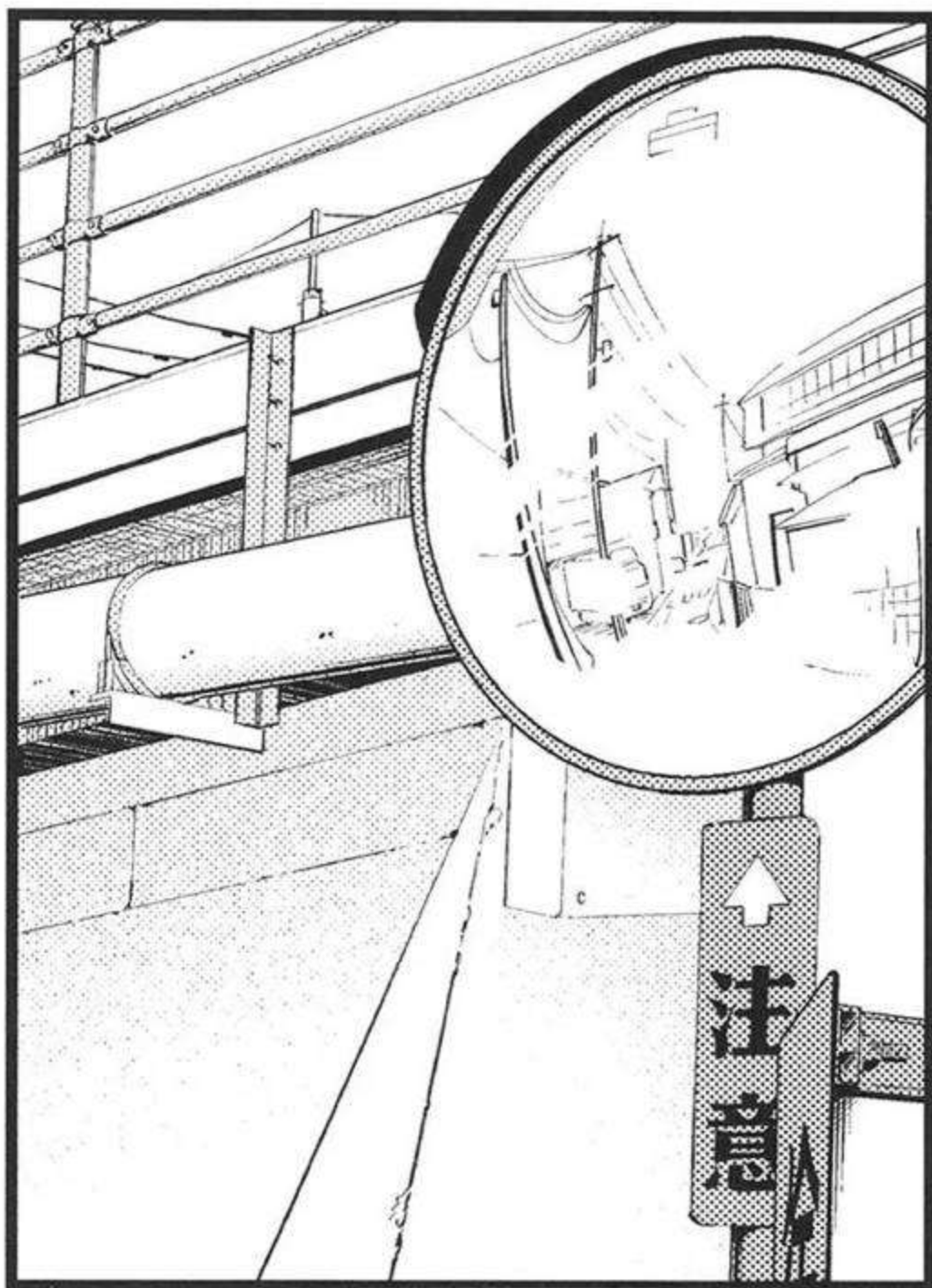
いいか

今日くらい



…わたしも痕
つけちゃおうかな

わたしの好きな
夕霧綴理に



次ページからゲストの
私雨様の小説です

とってもドキドキ
ありがとうございます！

私雨

それは短い言葉だった。短くて、短くて、さやが一息で言い切れるくらいに短くって。だけど、それがボクの一番聞きたい言葉だったんだと思う。

ずっと迷っていた。ずっとわからなかった。さやがいなくなったとしたら。隣にさやがいなくなったとしたら。ボクはどうすれば良いんだろうって。

——ううん、違う。隣にさやがいてくれることを、ボクは願っても良いんだろうかって。その祈りをボクは抱いても良いのかなって。そう思っていた。

だけど、さやが聞かせてくれたんだ。さやの気持ちを。ボクと違わない、その気持ちを。

「……もしかして、さっきの講堂での話、思い出していませんか？」

さやがボクのベッドに腰掛けたままほっぺたを膨らませた。怒っているって言うよりは——これは照れてる時のさやの顔だった。

「ばれたか」

「だってやたらと嬉しそうにニコニコしていますし……」

「嬉しかったから。さやの言葉で聞けて。ボクだけじゃなかったんだって思った」

「当然です。でも……わたしのほうが勝っているつもりですよ？」ってさやはちよっと得意げに微笑んだ。

「ボクだって負けてるつもりはないよ」って、隣に座るさやの手の甲に触れる。暖かくて、すべすべで、それはボクの手だって多分一緒のはずなのに、でもやっぱり自分の手を触れてるときには感じない気持ちよさがそこにある。

「いえ、ここは譲れません。……できれば負けていたいという気持ちもなくはないですが……やっぱりきつと、おそらくわたしのほうが強いはずで——」

言いながら頭を肩に預けてくるさやは甘えん坊さんだった。時々ボクにだけ見せてくれるちょーレアなさや。そんなさやを見た時のボクの行動はいつも決まっていた。一年だけ先輩のボクはさやをたっぷり甘えさせてあげなきゃって。それに、ボクももっとさやに触れたいからって。だから、ボクはさやの肩を抱き寄せた。さやの顔がボクの抱き寄せるのよりも早く自然と近寄ってくる。

もうすぐ触れる。そう思ったら——

「あっ」

世界が真っ暗になった。

まるで宇宙みたい。まるで海の底みたい。目を閉じたときよりもずっと真っ暗な黒色の世界。

「停電……？」っていうさやの言葉でボクもようやく理解できた。振り返ってベッドに膝立ちになってカーテンの間を覗くと、寮の他の部屋も明かりがついていないみたい

だった。

「外、真っ暗だ」

ぎしりとベッドが音を立てて、ボクの隣にさやが来るのがわかる。

「怖く、ないですか？」

雲越しの月明かりで微かに見えるさやの顔は不安の色じやなくって心配の色で、それを見てボクは少しほっとした。「大丈夫だよ。姿が見えなくても、さやがここにいて、わかってるから」

向かい合って手探りで抱きしめると、さやの手がボクの腰に回された。例え真っ暗だって、ボクにはこの手と身体を伝ってさやの温もりが伝わってくる。さやがいてくれる証拠が、この肌でわかるんだ。

「さや。もっと触れても良い？」

「こんな時に……ですか？」

「どんなときにでもさやには触れていたいから」

それにさやだってさっきそのつもりだったよねって思ったけど、言えなきゃさやがムキになって違うって言うから言わないで置いてあげる。

ボクが何も言わなくなっちゃって、さやは身体をベッドに横たえた。それが当たり前のことみたいに、いつもみたいにボクのベッドに横になる。少しだけ慣れてきた目でさやのシ

ルエットを追って覆いかぶさってお腹に手を伸ばした。パジャマの隙間に指を潜り込ませると、すべすべの肌が心地よい。

最初の頃はボクがこうやってさわわってしたら、さやはびっくりしたみたいにびくびくってしてたのに、最近は全然そうならないみたいだった。慣れてきたのかもしれないけど、なんだかちよつと悔しい。

空いた左手で頬に触れてドキツとした。少し熱い。風邪をひいた時のさやみたいだった。

「もしかして、具合悪い？」って聞いたらさやの手が伸びて、引こうとしたボクの左手を包み込む。

「だって……あんな事言わされたんですよ……？　それも、大勢の前で……」

さやも、勇気を出してくれてたんだ。あのあと、めぐやこずにも冷やかされたからわかる。もしあれがボクだったとしても、ボクでも恥ずかしくなってた気がする。一緒にいたいって。誰よりも隣りにいたいって気持ちを伝えるのは、思っているよりもずっと照れちゃうようなことだから。でも、さやはそうしてくれた。みんなに聞かれてもいいって思っ。ううん、もしかしたら、みんなにも聞かせたかったのかな？　せんしゅせんせー？　みたいなことで。

「さや」

名前を呼ぶとさやの身体が一瞬震えた。ほっぺたはまだ熱くって、むしろどんどんその温度が上がっていつてる気がする。

「今日はゆっくりできないかもしれない。だから……ごめんね」

ボクが謝ったら、さやはこくと頷いた。それはきつと、許してくれたって言うより、さやもそれを望んでいたから。「んっ……あっ……」

お腹を擦りながらその手を登らせていく。さやの引き締まった腹筋をさやは女の子らしくないですって笑ってたけど、ボクはこのお腹がすきだった。もちろんトレーニングやレスンですらとした筋肉に包まれているからなのもあるけど、一番の理由は、それがさやのだからなんだと思う。

「お腹、浮かせてみて」

その言葉はあんまり意味がなかった。ボクが言う前にさやは背中を反らせて少しだけベッドとの間に隙間を作った。そこにボクの指が入っていつてホックを簡単に外してみせる。朝自分の服はすぐに脱げないのに、なんでわたしを脱がせるのだけはそんなに得意になってるんですかって怒られたのを思い出した。でも、それとこれとは全然違うよね。朝はずっとすやすやって眠っているのが一番気持ちいいか

らできることならずっと着替えたくないでしょ。けどさやの服はこれからすることの邪魔になっちゃうから。ボクとさやがピタつくっついて触れ合うのに、今はこれは必要ない……よね。

シャツを捲って、バンザイってさせたらさやの腕からするすると袖を抜いていく。上が下着姿になったさやを暗いからまだよく見えないって思いながら目を凝らしてたら、ジロジロ見ないでくださいって怒られた。

下着も脱がせてあたたかいそれを脇へと置いておく。さやのほっぺに触れるとやっぱり熱くて、何回こうしてもさやが恥ずかしさをなくすことはないみたいだった。

手探りで先端に触れる。びくってさやの身体が震える。顔と負けないくらいその柔らかい膨らみが帯びた熱に、ボクの中でも同じ様に体温が上がっていくのがわかった。

覆いかぶさって、身体を重ねて、お腹をさすりながらキスを落とす。触れ合った唇の感触に吐息がこぼれて、二つの呼吸が混ざりあった。触れるだけのキスじゃ全然足りない。初めの頃の手探りだったスキンシップじゃもう満足できない。ボクもさやもそれは一緒に、二人で示し合わせたみたいに唇から舌を覗かせた。

首を傾けてあたたかい粘膜を絡み合わせる。今日のさやは甘えん坊だから、ボクの舌が中に入ってくるのを待って

いて、ボクがさやの唇を舐めると名残惜しそうにはしても追っては来ない。その代わり、ボクが少しでも先端をさやの中に差し込んだら、ずっとずっとそれを待ち続けてたっていうみたいに自分の舌を絡ませてボクの事を離さなくなる。

胸の膨らみを手のひらで包んで、親指と人差指で先端を摘むとさやが今どれだけ興奮しているかがわかる。最初は女の子のそんな仕組みなんて知らなかったけど、さやとこうしている間に自然と覚えた。さやはボクがしてあげるところが段々固くなっていくんだなって。さやにもまだ言っていないけど、多分さやは自分でそのことにもう気づいてる。ただ、恥ずかしいから言わないだけなんだ。

顔を上げると一瞬さやの顔が追いかけてきて、すぐにあって小さく声を上げて追うのをやめる。ボクはさやにそうやって求められるのが好きだけど、さやはじせーしんでそれを抑えているみたいだった。でも、ボクは知ってる。もっともってボクがさやを求めれば、もっともってさやもボクを求めてくれるっていうこと。いつもさやはそうだった。ボクがさやを求めた分だけ、さやもボクを求めてくれるから。

パジャマのズボンに手をかける。下着と一緒に引っ張ると、ボクがもう何も言わなくなっちゃってさやは腰を浮かせて

脱がしやすくしてくれた。

邪魔な布を取り去ったそこは、暗がりでもよくわかった。カーテンの隙間から微かに差す月明かり。その光を反射して、暗闇の中でもてらてらと自分の居場所を主張していたから。

「暗くてもわかるよ。さや、ボクので気持ちよくなってくれてる」

「やあっ……言わないで……ください……っ」

「でも、見えちゃうから。いつもより暗くても、いつもよりずっとわかりやすい」

照れたさやが耐えられないって言うみたい枕を手にとって自分の顔に押し付けた。でも、顔を隠してもさやの固くなった胸の先端も、ボクの眼の前にある雫を垂らすそこも隠れていないから、さやだけが外の世界を見ないようにしただけ。じゃあ、ボクはこのまま見てもいいってことだよね？ だからボクは、遠慮なんてしないでさやが零す涙を拭おうと舌を伸ばした。

「はあっ……！ んんっ、はあっ……」

入口に舌で触れると熱い粘液が口の中に入ってくる。ボクがよく知っている味と香りがボクの口いっぱい広がっていく。同じさやの匂いなのに、ぎゅってハグしたときも、キスをしたときも、今みたいにこうしているときも、全部

違って感じるから不思議だ。だけど、どれもボクの大好きな匂いで、これを嗅ぐだけでボクは今隣りにいるのがさやなんだなって、何も見なくたって実感できる。

「やあっ、んん……駄目っ……入口……ばっかり……はあっ」

さやの形に合わせて舌を上下させると、奥からどんどん愛液が溢れてくる。これが良いのかな？ これが好きなんだよね？ さやの好きな事はだいぶ憶えてきた。ボクがなにかするたびにさやが声を漏らして身体を揺らして、駄目って言ってやめさせようとするから。さやの言う駄目が本当は駄目じゃないって憶えたのは、何回目のときくらいだったかな？

唇を離して指先でなぞる。急に敏感なところに触れたら痛いのはわかってるから、まずはゆっくり、周りをぐるぐる回るみたいに。

「さや。うつ伏せになって」

ボクの指の動きに合わせてさやが腰を動かすから、もう周りだけじゃ我慢できなくなってるのはわかってた。さやだってそれを認めるみたいに、ボクに言われるがままに身体を返した。膝立ちになって、両手について、ワンちゃんみたいになってボクにお尻を向ける。

「さやの好きなやつ」

「わ、わざわざ言わなくていいですからあつ」

前にさやがボクに一回だけ教えてくれた。恥ずかしくて小さな声だったけど、この格好だと、さやがボクのものになったみたいを感じるって。さやのこと、ボクが貰って良いのかな？ 独り占めして良いのかな？ って聞いたら、さやはもうボクだけのものなんだって教えてくれた。じゃあ、ボクもさやにお返ししてあげなきゃ。

さやのお尻がボクの眼の前にあって、さやの呼吸に合わせて上下に揺れてる。ボクはそれに覆いかぶさるようにしてさやの背中を抱きしめた。

ボクも膝立ちで四つん這いになって。左手はベッドについて右手はおなか側からさやのそこへと手を伸ばす。くちゅり。また音がしてさやが吐息をこぼした。

指先はもう灼けるように熱い。これをこのままさやの中に入れたらどうなるんだろう。ボクと同じ場所が熱くなっているのがわかる。ボクの鼓動が早くなっているのはきつともうさやの背中に伝わってる。

「さや……良い？」

耳元で囁く。答えはわかってる。だけど、ちゃんとさやの言葉で聞きたいから。ボクがさやをほしいのと同じ様にさやもボクを欲しがってるって聞かせてほしいから。

「来て……ください」

指をゆっくりと沈めていく。そこはまだぴたりと口を閉じているのに、中からどんどん溢れてくる液体のお陰でぬるぬると指先が沈んでいく。その熱さはボクが待たせていたせいで、ボクのことをずっと待っていた証拠だった。

「はあ……んん、はあ……あう……」

きつい中を進んでいくたびに、顔のすぐ近くでさやが声を零す。それを聞きたびにボクのお腹の奥もジリジリとしていって、これ以上ゆっくりと進めるのがつらくなっている。

「さや……きつい……熱い……」

沈めていく指を折って指の腹で内側を擦る。膨らんだ丘の山頂を擦るたびにボクに抱きしめられたさやの身体がよじられてまるで逃げようとしているみたいに暴れ出す。

「まだ始まったばかりだよ」

「だって……でも……んっ……！」

いつもはもう少し順番に進めるのに、今のボクにはそんな余裕がなかった。さやの中がボクの指をきゅんきゅんって締め付けるたびに、ボクはそれに答えるようにしてさやの大好きな敏感なところを撫でる。ボクがされて好きなところを重点的に刺激するたびにさやの身体が跳ねて、ぎゅってしていないとボクから離れていってしまいそうになる。暗い中、ほとんど見えなくても身体の感触と温もりでさ

やを確かめて、その耳たぶを甘噛する。

「ああうっ……！」

軽く跳ねたのは、もしかしてさや、イツちゃったのかな？

耳を食みながら今度は舌を突き出して穴の中を舐めていく。上も下も、どっちもさやの中を余すことなく愛しくとさやの身体がそれに答えるみたいに震えて、気持ちよさそうなさやを感じるだけでボクにまでその快感が伝わってくるみたいだった。

「おっ、音がっ……はあっ……綴理せんぱいのっ……音とっ、吐息があっ……んんっ！」

さやがそれを好きなのは知ってるから。恥ずかしがって目をつむることはできても、音を聞こえないようにするのが無理だっていうのはボクも憶えたから。だからこうやってさやに、ボクたちがこうやって触れ合ってる証拠を聞かせてあげるみたいにすれば、それでいつだってさやはもっと喜んで可愛い声を聞かせてくれた。

「聞きたい。さやの声、もっと」

指を出し入れする。親指で一番敏感なところをぐりぐりってしてあげる。一緒にもう一度かぶって耳たぶを噛んだら、さやの身体がまた小さく痙攣した。

「ああっああっ！ んんっ……はあうっ！」

「さや、かわいいよさや。ボクがしたとおりに気持ちよくなっているからね」

体重を支えられなくなったさやの左手から力が抜けてベッドに倒れ込む。枕に沈んだらしい顔を追いかけるとそれが振り向いてキスを求められた。答えるようにして唇を合わせるとボクが開くまもなくこじ開けられて柔らかい舌が侵入してきた。

「つづ、り……せんぱっ……はあっ……」

膝も立てられなくなってベッドに沈み込んで、さやは一心不乱にボクの舌を追いかけて回す。時々口の中から飛び出して顔がよだれまみれになるのなんて構わないみたいにならずとボクを探し続けて欲しがっている。

「さや、気持ちいいの？」

「んっ……はいっ……はあっ……綴理先輩のっ……んっ……綴理先輩だからっ……こんなにつ……はあっ……」

「さや、どんどんきつくなっている」

「だって……離したくないからっ……んっ！ ずっと、離したくないから……はあうっ……！」

ボクが指のスピードを上げるとぐちゅぐちゅという水音も増していった、たとえ見えなくなってもさやのそこがどうなっているのかは想像がつく。絶対シートにまで垂れてるし、絶対さやには怒られるけど、例え怒られたってボクはさや

を愛する手を止めることはできなかった。

明日の朝さやに怒られるとしても、そのときは明日の朝のボクに代わりに怒られてもらえば良い。今のボクはただ、さやの熱を全部この身体で受け止めてしまいたかったから。「つづつ、せんぱっ……はあ、っ……ぎゅって……ぎゅって、抱いてくださっ、んんっ……！ 暗いから……はあっ、いてほしいから……はあっ……んんっ」

さやの可愛いらしい懇願。だけど別に狼狽える必要も躊躇うこともなかった。それはボクだって——同じだったから。「大丈夫だよさや。ボクはここにいます。さやもここにいます。ほら、ボクの温もりを感じて」

身体を重ねる。さやの事を押しつぶさないように、ただボクの重みをちよつとくらいは感じてほしいってわがままをして。さやの背中に密着させるようにして胸を押し当てる。

「つづついい、せんぱいっ……はあっん……！ またっ……またあっ……！」

「良いよ、さや。ボクがぎゅつとしてあげる」

「はあっ……ん、どこにもっ……いかないでっ……くださっ……んっ……！」

「どこにもいらないよ。ボクはここにいます。ほら」

ドクドクドク。ボクの心音がさやに伝わっていく。お腹

を抱き寄せて身体を密着させると二人の体温が混ざり合う。明かりのない暗闇の中、それでもボク達はここにいて、ボク達の温もりは一つになっていく。

「綴理っ、先輩っ……はああうっ!!」

一番深い所に指を差し入れて、奥のところをノックして、痛いくらい締め付けられる感触を憶えながらキスをする、さやの舌が絡みつくと同時にさやの身体が大きく痙攣した。二人とも息をするのも忘れて絡み合って、ボクのお腹の下でさやの身体が何回もビクビクする感触でボクの中にもあたたかいポカポカが広がっていくのがわかった。

「んんっ、あああっ……はあっ、はあ……はあ……っ」

枕に顔を埋めたまま何度も身体を震わせるさやの髪に、おまけみたいにキスを一つ落とす。そうしたらそれで安心したみたいに、さやが肩を上下させて呼吸が深くゆっくりしたものになっていった。

「つづ……り……先輩……」

仰向けになって横に並ぶと、さやがボクの方へと身体を寄せた。「重かった？ ごめんね。今度はさやがボクに乗ってもいいよ」って言うと、さやは小さく安心したみたい息を零してボクの左胸に頭を預けた。

荒かった息が段々と落ち着いていく。乱れた髪を手櫛で梳いてぽんぽんぽんってあやしてあげると、さやは今みた

いに落ち着くって言った。

預けられた頭とぴったりと寄り添ったさやの身体から伝わってくる熱に、さやがここにいるんだって実感する。暗い部屋の中でも、こうしてボクの隣にさやが並んで寝ているんだっていうのが、この熱だけでわかる。

「……綴理先輩の心臓、ドクドクって言ってます」

「だってボク、まだ生きてるよ」

「それは……そうですけど」

ボクは真面目に答えたつもりなのに、さやはボクが冗談を言ったと思ったみたいでクスクスと笑った。

「さやもドキドキしてる。ボクの身体にまで伝わってくる。さやの熱と一緒に。こうやって並んで寝てたら、さやが隣りにいてくれるんだって実感するんだ」

「隣りにいるって言ったじゃないですか」って、さやがボクの右手を取った。ボクの右手の指にさやの左手の指が絡んで、まるでお祈りしているみたいになる。

「わたしはおばあちゃんになっても一緒のつもりですよ」

「じゃあ……その後は？」

隙間から差す光が、ぼんやりとさやの顔を照らす。眼の前に浮かぶさやの顔はボクを見上げると、少しだけ考えて、それから少しだけ笑って、将来の夢を語るみたいに静かに言った。

「もしわたしのほうが先なら——笑ってまた会える日を楽しみに待っていますよ。もしわたしのほうが後なら——ゆっくりのんびり。やっぱり笑ってまた会える日を楽しみにしています」

絡められていた指がぎゅっと握られた。それに答えるみたいにボクはさやの身体を引き寄せて、その頭に顔をうずめる。

「長生きしてほしいよ」

「……あなたですよ」

さやの顔は見えない。眼の前にあるさやの髪の毛からは、いつもの嗅ぎ慣れた良い匂いだけが漂ってくる。

「ボクはさやの料理を毎日食べてるから元気だよ」って笑うと、さやは「それならわたしも一緒ですよ。毎日毎食、同じものと食べてますから。これからだって」と一緒に笑った。

「じゃあ、ボク達一緒だ」

「ええ。一緒ですよ」

もしかしたらボクはずっと迷っていたのかもしれない。ボクの中の二つの気持ちに。そのどっちが正しいんだろうって、どっちを選ばなきゃいけないんだろうってずっと決められずにいたのかもしれない。

さやがいなくても笑っていないという気持ちと、さ

やと何があっても離れたくないっていう気持ちは、きっと矛盾していないんだ。そのどっちだってボクの気持ちだし、その両方を願ったって構わないんだ。

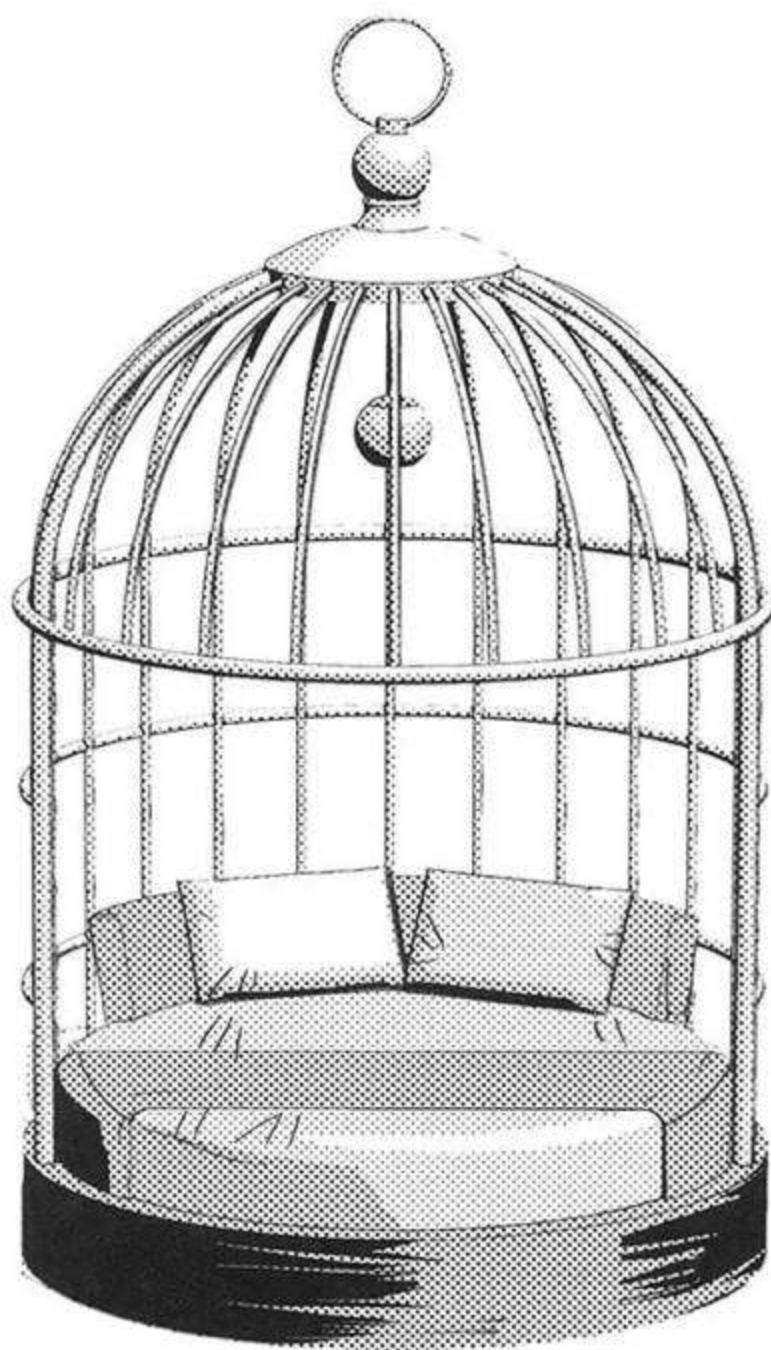
身体を起こして窓の方に身を寄せると、ボクの背中に張り付くようにしてさやも起き上がった。肩に乗せられた頭の重みに心地よさを感じながらカーテンを僅かに開くと、金沢には珍しい満点の星空が広がっていた。

これは——昔の船乗りさんと同じだった。さやが前に教えてくれた。昔は、星座を見て船で海を走ったんだって。

例え夜の大海原に船を出しても、この星空の下でなら航路を迷わない。ボクのこれから先へと続く進路は、輝く星を見ている限り間違えることはないんだ。

ボクは、輝くものを近くで見ているのが好きだから。だからきつと、これから先も道に迷うことはない。一番眩しい星が、ボクの直ぐ側にあるんだから。

さやの手を取って胸で抱きしめると、ボク達は瞬く星々のキャンバスを二人で見上げた——



お問い合わせ、ご意見などは
X(ツイッター)、pixivでのご確認、
またはメールへお送りください。

2025/01/19 発行

発行：紙袋Works/環月紙袋
印刷：大陽出版株式会社様

kamibukuro1@gmail.com
X(twitter)=kanduki_lily PixivID=1610290

無断転載・アップロードはご遠慮ください。



X(旧Twitter)



感想用マシュマロ
(匿名)



Kamibukuro_works presents
LoveLive! fan book
no.138

